

## 牛丼の吉野家 第一号店は築地市場から



加藤 良一 令和4年(2022)4月26日

庶民の味、牛丼の元祖吉野家の創業店は、築地の旧中央卸売市場の中にありました。市場が休みのときは合わせて店も休みでした。

吉野家は、明治32年(1899)、当時中央区日本橋にあった魚市場で創業、1号店は個人商店として誕生し、牛丼と牛皿、みそ汁、卵といった簡単なメニューだけでした。これは今でも大きくは変わっていません。

経営の原点は「はやい うまい やすい」に徹すること。その後、大正12年(1923)の関東大震災により市場が築地へ移転したことに伴って移転しました。

この店は、間口が一間半程度で中はコの字型のカウンターのみ、15人ほどしか座れません。あまりの狭さからか、箸立ては壁掛け式になっています。カウンターに座ったままで箸がとれるほどでした。さすがにこれはほかでは見たことがない風景ですね。



客の回転率は高したもので、これこそ典型的なファストフード店です。店に入ってから出るまでに10分はかからないかも知れませんね。客は掻きこむように箸を動かし、のんびりすることもなくそそくさと出ていきます。そんな店ですが、使用している肉はれっきとした和牛です。メニューは限定されていますが、ツユの量など注文のオプションはいろいろありました。

長靴に作業服という出で立ちの市場関係者など、食のプロがたくさん出入りしており、さっと食べてさっと店を出る、「はやい うまい やすい」が求められていたのです。

平成16年(2004)、米国産牛肉が輸入禁止になり、牛丼の販売を諦めざるを得ない状況になったにもかかわらず、この1号店だけは国産の和牛を使用して売り続けました。魚河岸の中にある築地店は特別なのです。

ところが、築地市場は老朽化が進み手狭ということもあって平成28年(2016)に江東区豊洲に移転しました。移転の際の大混乱は皆様よくご存じのことと思います。けっきょく、吉野家は市場と離れることはできないと、豊洲移転に合わせて創業店も移転しました。

豊洲市場から銀座までは1km、東京駅や日本橋まで2kmという地の利を活かし、引き続き食文化を支えていくとしています。しかし、せっかく新しい豊洲市場に移ったのに、思いのほか手狭に見えるのはどういうことでしょうか。

築地市場跡地の将来設計は、当時の配布物によれば、右図のように市場の内外を架橋でつなぐように描かれていましたが、その後どうなったのでしょうか。東京オリンピックのときには一時バスターミナルに使用されましたが…。



晴海通りから見た築地新市場の外観図



ついでながら、左の写真の吉野家どんぶりは、以前大宮ソニックシティのはす向かいにあった『ピアシェンケ』という大きなビアホールの「ケンチャン」ことオーナーの新藤健吾さんから頂いたものです。

残念ながら『ピアシェンケ』は平成15年(2003)に閉めてしまいましたが、男声合唱プロジェクトYARO会の立ち上げパーティに使ったりと、ずいぶんお世話になったビアホールでした。

---

ところで、吉野家といえば、現在「人権・ジェンダー問題」で伊東正明常務取締役が解任され世間を騒がせています。早稲田大学の社会人講座での発言が問題視されたことを受けて処分されました。

伊東氏は講座で、吉野家が女性顧客層の拡大する着眼点を「生娘をシャブ漬け戦略」と説明したことがSNSで拡散し、「人権・ジェンダー問題の観点から到底許容することはできない」として解任されたわけです。吉野家では、コンプライアンス対策を強化し、二度と起きないようにするとしています。しかし、吉野家が受けた被害は予想外に甚大です。

ここではこれ以上触れず別の機会に譲りますが、創業当時に立ち戻って、改善されることを望みます。

---

**Back**

「なんやか」TOP へ戻る

**Home**

「ホームページ」表紙へ戻る